

令和5年度 紫香楽宮フォーラム

# 紫香楽宮と恭仁宮

日時 令和5年(2023年)12月17日(日)  
13時00分～16時30分

場所 あいこうか市民ホール

主催 甲賀市教育委員会



# 目 次

事例報告 1	考古学から迫る古代宮都の「特異点」・恭仁宮	1
事例報告 2	発掘調査でわかった紫香楽宮の中心部	12

## スケジュール

13時00分 開演

13時10分 事例報告 1

考古学から迫る古代宮都の「特異点」・恭仁宮  
京都府教育庁文化財保護課 古川 匠

14時10分 事例報告 2

発掘調査でわかった紫香楽宮の中心部  
甲賀市教育委員会歴史文化財課 小谷 徳彦

15時10分～15時20分 休憩

15時20分 フォーラム 紫香楽宮と恭仁宮

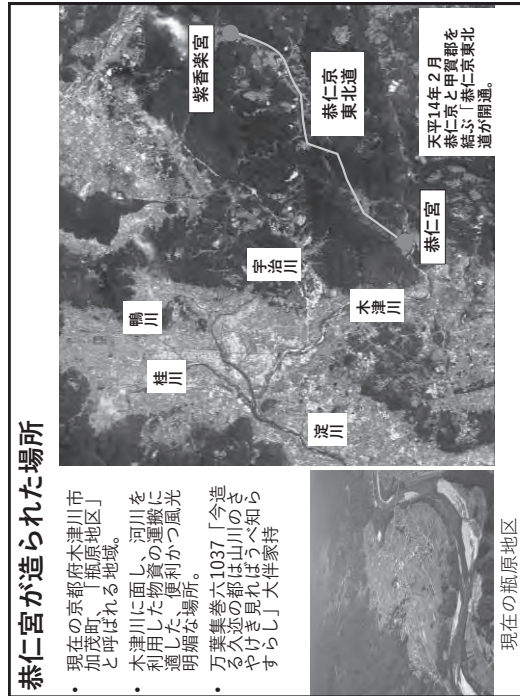
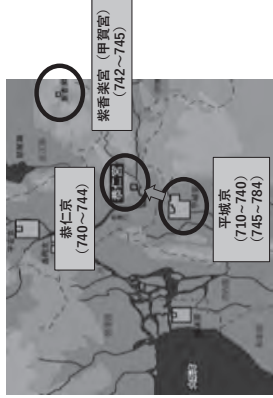
コーディネーター 龍谷大学 國下 多美樹  
パネラー 古川 匠 小谷 徳彦



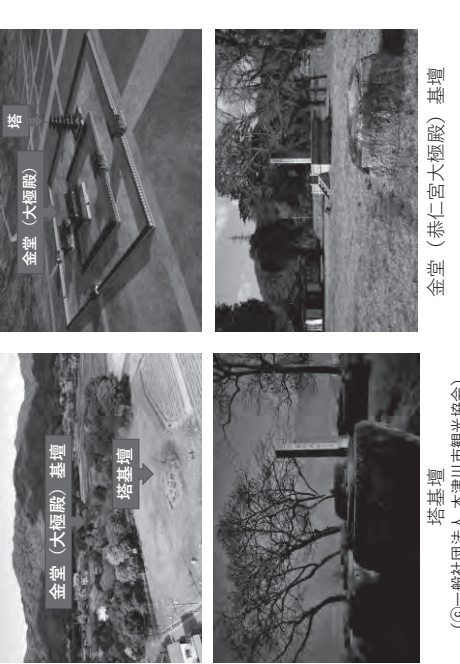


### 古代宮都の流れにおける恭仁宮・恭仁京の位置

- ・ 京都府で、本格的な都城として最初に造られた都。
  - ・ 「国分寺建立の詔」と「墨田永年私財法」が作られた。
  - ・ 都市を造るにはあまりにも狭い立地。宮の構造が独特。
  - ・ 宮都の歴史の流れの中にうまくはまらさない。古代宮都の「特異点」
- ※特異点とは…一般的な基準をうまく適応できない点（数学の用語）



### 現在の恭仁宮跡



### 飛鳥時代の山背国



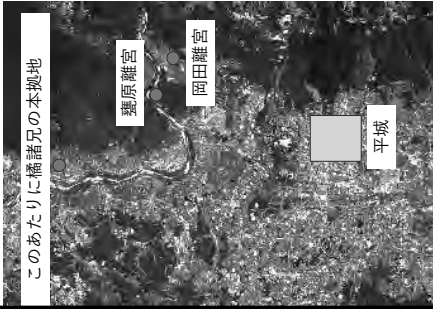
高麗寺

奈良山

飛鳥

- 政権の中心があった大和国の近隣で、大和を支える役割をもっていた。
- 大型の古墳を造る勢力がこの時代には既に存在せず、京都府南部では、渡来系氏族（秦氏など）が土地開発を活発に行っていた。
- 国名：「山背国」「山」（奈良山丘陵）の背後にある国。「山城国」になるのは平安時代になってから。
- 奈良盆地東南部の飛鳥を中心とする政権からは心理的に遠かったのではないかと。山の向こう。

### 平城京・宮からみた山背国



このあたりに橘諸兄の本拠地

豊原離宮

岡田離宮

平城

- 奈良盆地の北端にある平城宮にいる天皇から見ると、自分の背中側にある国。
- 山背国豊南郡（現在の木津川市加茂町）に離宮が造られる。風光明媚で手堅な旅行で政務の重庄から解放される場所。
- 岡田離宮
- 和銅元年（708）元明天皇が行幸
- 豊原離宮
- 和銅4・6・7年 元明天皇
- 霊龜元年 元正天皇が行幸
- 神龜2・4年、天平8・11年 聖武天皇が行幸
- 現在の井手町を本拠地とした橘諸兄が力を蓄え、「相築別業」で天皇を歓待。

### 井手寺跡・栢木遺跡（橘氏の氏寺）



- 令和3年（2021）の発掘調査で、五重塔跡が見つかる。（井手町の新庁舎建設予定地）
- 橘諸兄が興した橘氏の氏寺と考えられる。



橘諸兄（684～757）

皇族であったが、臣籍降下し、橘姓を賜る。聖武天皇の皇后・光明子の異父兄。聖武天皇の治世を支えた重要な人物。

### 聖武天皇と京都府南部（山背国）①



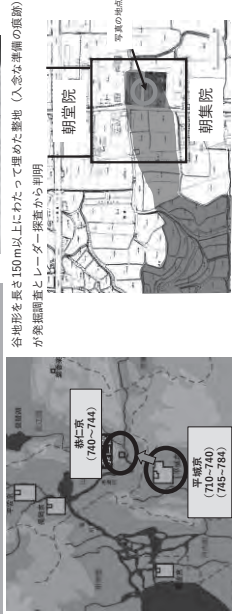
聖武天皇（701-756）

- 文武天皇の第一皇子として誕生する。和銅7年（714）に元服、立太子。
- 皇太子時代の豊原離宮行幸に同行していた可能性がある。（和銅7年に元明天皇、霊龜元年に元正天皇）
- 奈良時代の「行幸」は天皇に限らず、皇太子も同行するのが通例。
- 聖武天皇は即位後も数年に1度、豊原離宮に行幸。山背国に対して個人的に親しみを持っていたのでは。

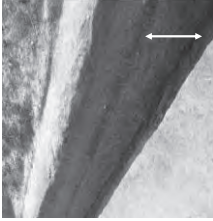
### 聖武天皇と京都府南部（山背国）②

- 天平7年(735)～9年(737) 天然痘の大流行。遣唐使が唐で罹患し、持ち帰ってしまった。総人口の25～35%が死亡。
- 天平9年(737) 国政を担った藤原四兄弟(武智麻呂・房前・宇合・麻呂)が死去。
- 傍流の皇族であった橘諸兄が政権の中心に。

天平12年(740) 聖武天皇は平城京を築ち、同年12月、恭仁京を都とした。



谷地形を高さ150m以上にわたって掘めた整地(入念な準備の痕跡)が発掘調査とレーザー照査から判明

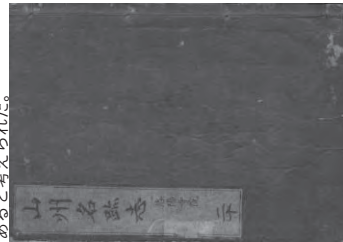


### 恭仁宮・恭仁京の探求

- 聖田永年私財法
  - ・天然痘の大流行で人口が大幅に減少し、衰退した国力を回復するため、有力者が率先して開墾に取り組みめるようにした。
- 諸国の佳い場所（「国華」）に七重塔を伴う寺院を建てるように命じた。
- 奈良時代のターニングポイント
  - ・聖武天皇が独自の国家的展望を胸にだいで造った都。
  - ・続日本紀天平十二年十月廿六日条○己卯。「勅大將軍大野朝臣東人等曰。朕、縁有所意。今月之末、暫往關東。」（意図を知らせていない）
  - ・聖武が意図を述べていないので、探求の対象となってきた。

### 恭仁宮探求のあゆみ① 江戸時代

- 江戸時代に編纂された地誌『山州名勝志』、『山城名勝志』などで取り上げられる。
- 『続日本紀』（平安時代初期に編纂された勅撰国史）の記述、万葉集所収の大伴家持の歌などが記載された。恭仁宮の場所も考察。瓶原の対岸、木津川の南にあると考えられた。



『山州名跡志』正徳元年(1711)



『山州名跡志』恭仁宮跡周辺図(左が北)

### 恭仁宮探求のあゆみ② 明治・大正

- 近代の実証的研究はじまる。喜田貞吉は恭仁宮の所在は瓶原である、と1900～1910年代に主張。江戸時代以来の通説に反論。
- ・交通至便で風光明媚
- ・藤原氏に代わって台頭した橘諸兄の勢力圏



明治時代の瓶原



喜田貞吉(1871～1939)  
京都帝国大学教授・東北帝国大学講師  
(古代史・民俗学・考古学)

**恭仁宮探求のあゆみ③ 昭和 (歴史地理)**

足利健亮は、平城宮・京の発掘調査成果も視野に入れながら、昭和44年(1969)に恭仁宮の範囲と各施設の位置を歴史地理学の手法(現在の地形、地割、地名等から考察)で推定。



足利健亮 (1936~1990)  
京都大学教授 (人文地理学)

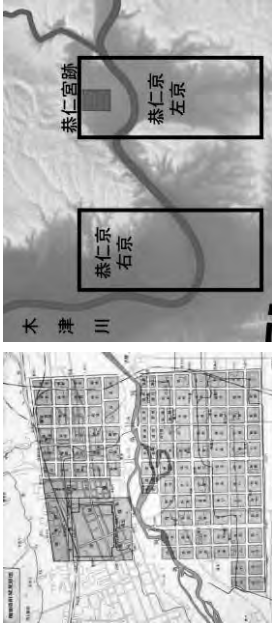
**恭仁宮探求のあゆみ④ 昭和 (文献史学)**

・紫香楽宮に大仏を建立するための拠点であった。(瀧波貞子説)



**恭仁宮探求のあゆみ④ 昭和 (文献史学)**

・木津川が恭仁京を横断して東西に流れるのは、中国の洛陽の都をモデルにしている。(瀧川政次郎)



洛陽 (隋唐期)

恭仁京 (足利説・奈良時代)

・恭仁宮の工事に渡来系氏族の秦氏が大きな役割を果たした。(井上満郎)  
『経日本紀』天平14年(742)8月5日記事「大宮垣築造の功により、造宮録正八位下の秦嶋麻呂が従四位下に昇進(十三階昇進)した。」(大意)

**京都府・木津川市(旧加茂町)教育委員会が発掘調査を開始(幻の都から現実の都へ)**

1973年(昭和48)文献・分布調査  
1974年(昭和49)発掘作業を開始

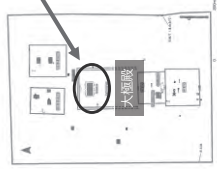


瓶原地区の住民のみなさん、考古学専攻の大学生が長年にわたる調査に参加することに。



### 大極殿基壇の発掘調査（昭和51年）

大極殿（だいごくでん）とは  
 年賀の儀礼、天皇の即位といった国家儀礼が行  
 われた建物。国家の最中枢に位置づけられる。  
 基壇（きだん）とは  
 周辺の地盤より一段高く土を盛り上げて建物の  
 基礎としたもの



恭仁宮大極殿の基壇



恭仁宮大極殿復元CG

大極殿基壇の発掘調査で、大極殿の柱の位置、間  
 隔が判明＝建物の規模が復元可能に

### 平城宮の復元大極殿は恭仁宮大極殿の調査成果から

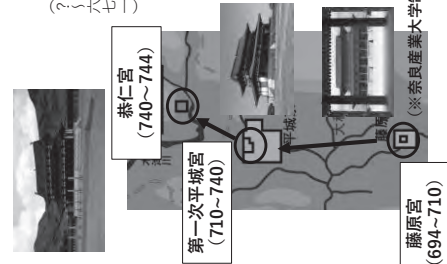


柱の数、間隔は恭仁宮の調査から判明



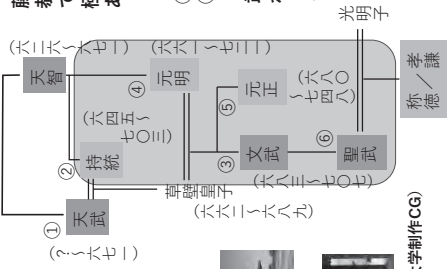
礎石の形状、大きさも恭仁宮が参考にされた。

### 大極殿は藤原宮から平城宮、そして恭仁宮へ



藤原宮・平城宮・  
 恭仁宮の発掘調査  
 で、3つの宮の大  
 極殿は同じ建物で  
 あったことが判明。

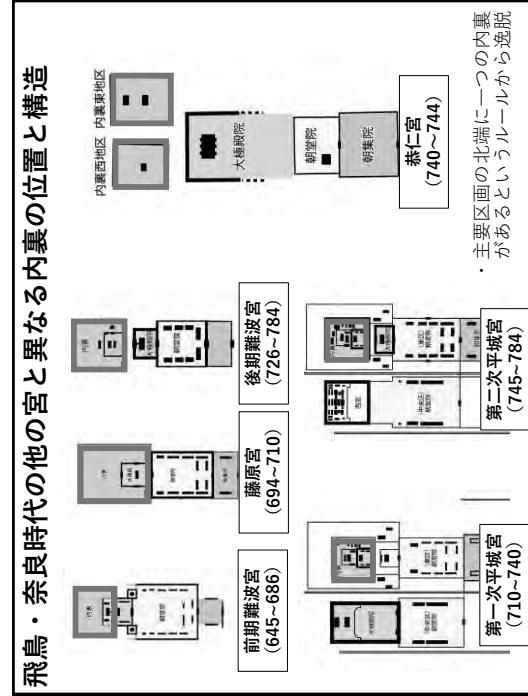
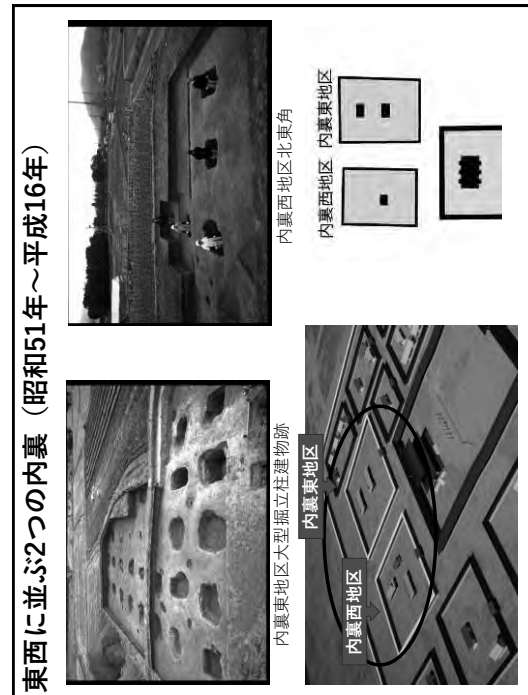
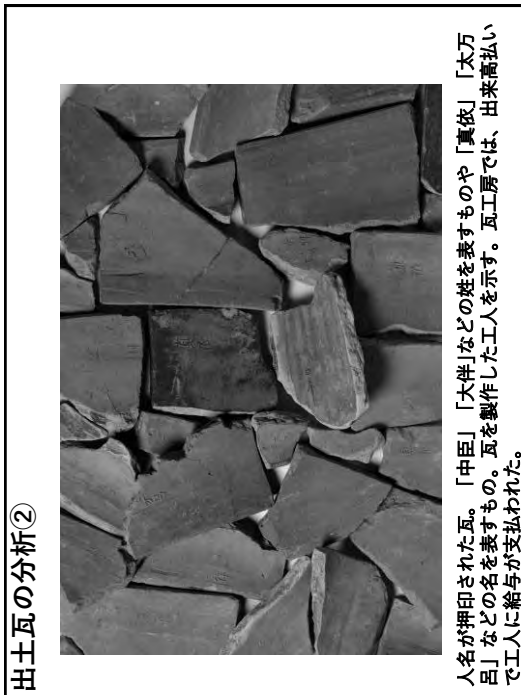
②持統、③文武、  
 ④元明、⑤元正  
 4代の大極殿が聖  
 武天皇に受け継が  
 れた。(※天武天皇から  
 かぞえた代)



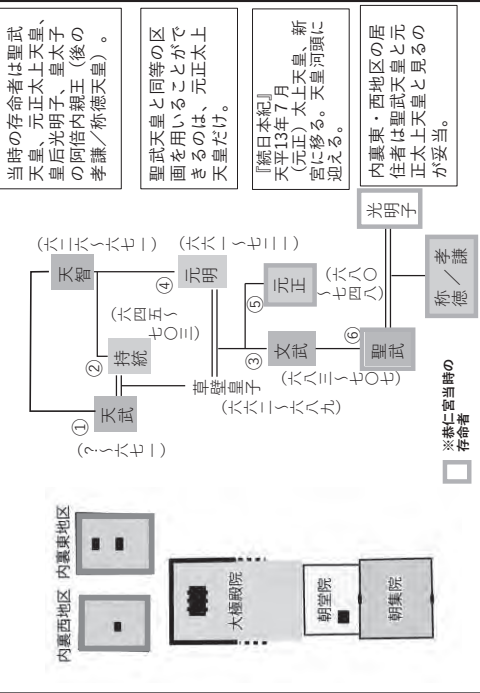
### 出土瓦の分析①



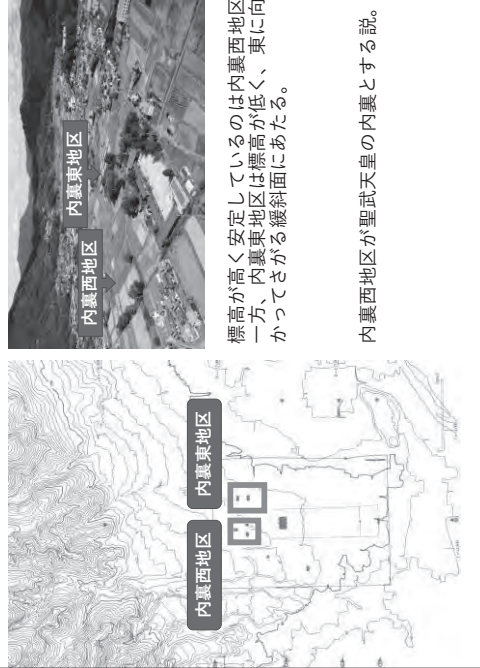
左・中：恭仁宮造営にあたって新しく造られた瓦  
 右：平城宮から運ばれた瓦  
 新しい瓦は目立つところに用いられた。



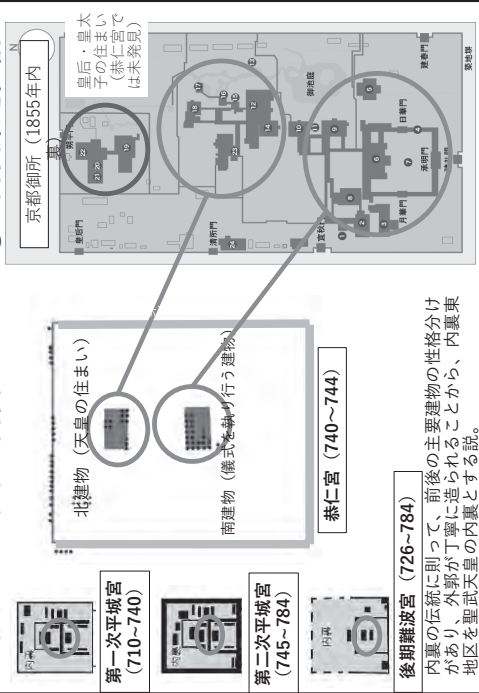
### 内裏西地区・東地区の居住者は？



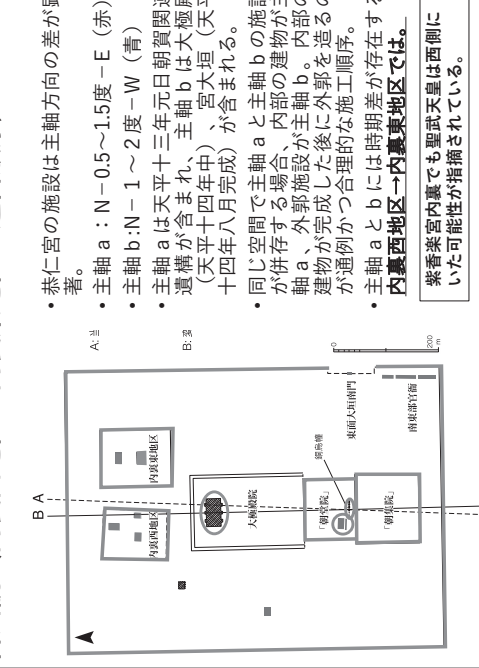
### 聖武天皇はどちらの内裏にいたのか① 内裏西地区説



### 聖武天皇はどちらの内裏にいたのか② 内裏東地区説



### 古川説 (内裏西地区・内裏東地区の造営順序)



宮外郭の発掘調査（平成元年～8年）



実際の恭仁宮の範囲（赤）

足利説の恭仁宮の範囲（黒）



外郭東・礎石立ちの門跡



外郭南西角・大垣基礎の石垣

恭仁宮の外郭が、当初の想定よりも一回り以上小さいことが判明

版築の大垣（築地堀）



版築：板材を平行にならべたあいだに土を入れて突棒で付き固める工法。築地堀、基礎などに使用。



突棒の痕跡

版築の築地堀（京都市内の寺院）

板材（樫板）の木目が転写されている。

恭仁宮外郭大垣のイメージ（平城宮外郭大垣）

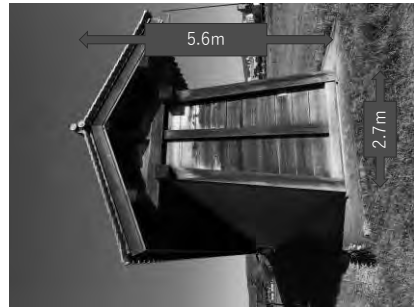


平城宮朱雀門の両脇に復元されている外郭大垣

版築で付き固めるため時間を要する工法。

『**韓日本紀**』（**恭仁宮大垣の配序**）  
天平十三年（七四二）一月一日「宮垣未就。」  
天平十四年（七四二）八月五日「詔、授造宮  
録正八位下兼下嶋麻呂從四位下・・・以築大宮  
垣也。」

難工事であったことが分かる。



恭仁宮の大垣も、高さはほぼ同じか。

主要区画の調査（～令和3年）

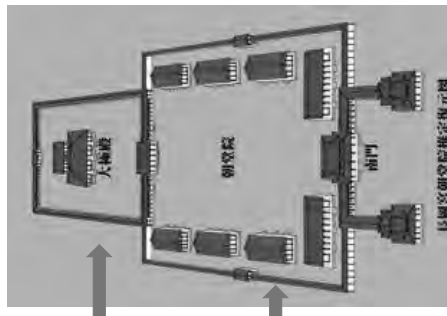


掘立柱塼の工事イメージ

主要区画の大きさを確定  
するのに多大な時間を要  
した。

朝堂院・朝集院の掘立柱塼跡

### 宮における主要区画のあり方



大極殿院

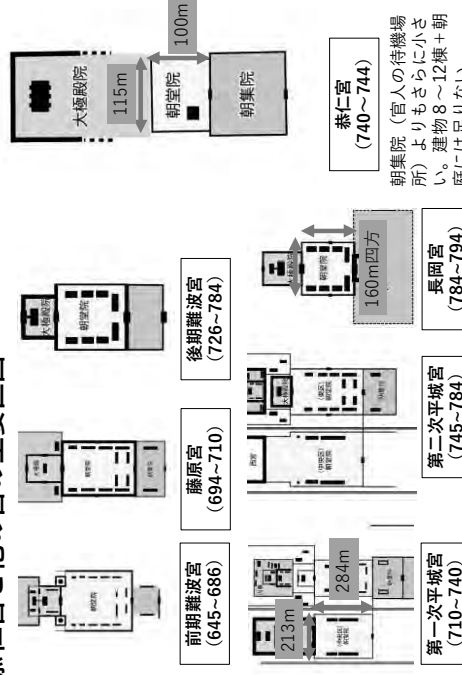
- 元日朝賀や即位儀礼といった重要な儀礼が行われ、通常は閉じられている。

朝堂院

- 二官八省の官人たちが職務を行ったり、儀礼を行う空間。常に使われている。
- 8棟または12棟の建物が規則正しく配置される。
- 中央の広場（「朝庭」）は、重要な儀式のときに官人達が参列する場所

広い面積が必要な空間

### 恭仁宮と他の宮の主要区画



前期難波宮 (645~686)

藤原宮 (694~710)

後期難波宮 (726~784)

第二次平城宮 (745~784)

第一次平城宮 (710~740)

長岡宮 (784~794)

森仁宮 (740~744)

大極殿院 115m

朝堂院 100m

朝集院

朝集院 (官人の待機場所) よりもさらに小さい。建物8~12棟+朝庭には足りない。

### 朝堂院の探求① 朝堂建物 (平成24~26年)

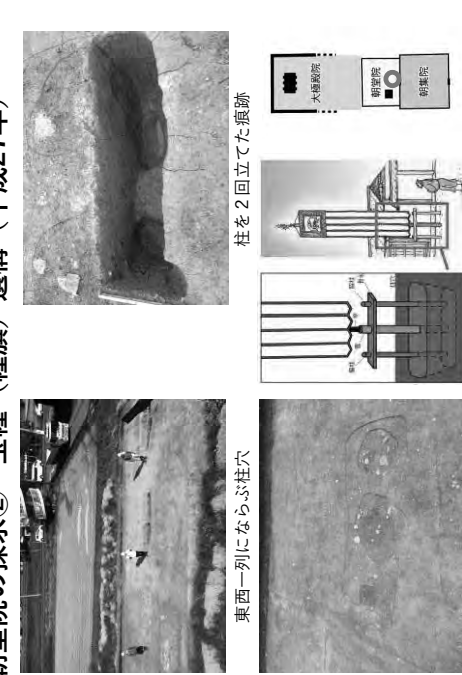


朝堂院の遺構

(各柱穴の横に森仁小学校5・6年生に立ってもらった。)

朝堂院南西部で見つかった建物跡。柱の痕跡から、床の高い構造であることが判明。通常、朝堂建物は床が低いので、きわめて特異な構造。

### 朝堂院の探求② 宝幢 (幢旗) 遺構 (平成27年)



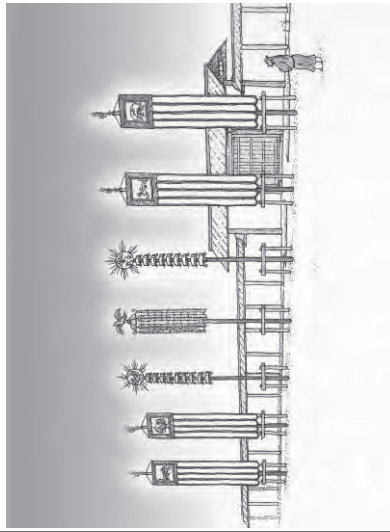
東西一列にならぶ柱穴

柱を2回立てた痕跡

柱構造の復元

1つの柱穴に3本の柱を立てた痕跡

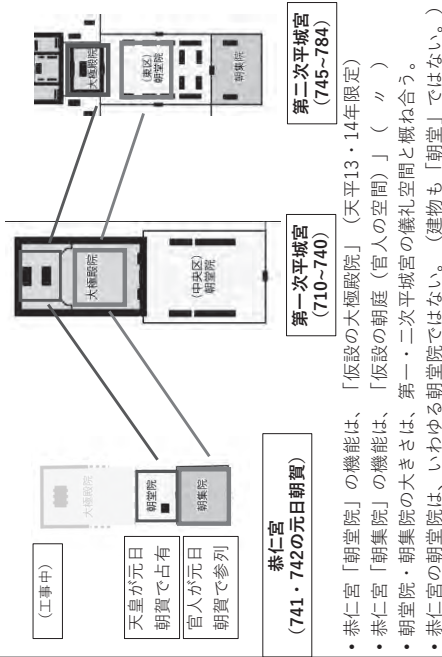
朝堂院の探求② 宝幢（幢旗）遺構



『続日本紀』  
 天平十三年（七四一）正月癸未朔。天皇始御恭仁宮受朝。  
 天平十四年（七四二）春正月丁未朔。百官朝賀。恭仁宮大極殿未成。構遺四回廊。於此受朝焉。  
 天平十五年（七四三）正月癸卯。天皇御大極殿。百官朝賀。

元日朝賀など重要な行事の際に大極殿の前に立てられる。『続日本紀』の記述から、恭仁宮では大極殿完成前の13・14年の元日朝賀がどこか別の場所で行われたことは知られてきたが、発掘調査から、朝堂院で行われたことが判明。柱を立てた回数も合致。

朝堂院の探求③ 朝堂院・朝集院は恭仁宮独特の機能



- ・ 恭仁宮「朝堂院」の機能は、「仮設の大極殿院」（天平13・14年限定）
- ・ 恭仁宮「朝集院」の機能は、「仮設の朝廷（官人の空間）」（ // ）
- ・ 朝堂院・朝集院の大きさは、第一・二次平城宮の儀礼空間と概ね合う。
- ・ 恭仁宮の朝堂院は、いわゆる朝堂院ではない。（建物も「朝堂」ではない。）

朝堂院の探求④ 中央区画の実態は



- 恭仁宮CG（本格的な整備状況を推定）  
 見つかった遺構
- ・ 仮設の儀礼空間として使われたあとの中央区画の本格的な整備を示す遺構は見つからず。
  - ・ 遺構が削られたか、本格整備がされる前に廃都となったのか、2つの考え方があり得る。

恭仁宮発掘50年のあゆみの主な成果

平城宮から移築された大極殿の実態解明

- ・ 大極殿の規模が判明。遺構の残存状況が良好
- ・ 『続日本紀』に記されるとおり、大極殿と大極殿院回廊が平城宮から移築されたことが判明

独自の構造が判明

- ・ 東西にならぶ2つの内裏
- ・ コンパクトな全体構造

独特な空間利用が判明

- ・ 朝堂院は、古代の宮としては非常に小さい
- ・ 朝堂院と朝集院を元日朝賀の場として活用

**難航した発掘調査のあゆみ**

- **ほかの宮（平城宮跡など）とは異なる恭仁宮独自の構造**  
「独自の殿舎配置・特殊性」、「他宮とは単純に比較できない」（1981年の記述）
- **調査の指針とした足利説よりも小さいことが判明**  
「昭和59年から63年まで外郭を探す努力をしたが、まったく見つかからない。」（1989年の記述）

- ほかの宮の発掘調査成果を援用できない。
- 調査にあたっての「羅針盤」であった足利説が適用できない。



白紙の状態、宮を構成する空間の場所と大きさ、空間の機能が全く不明な恭仁宮に向き合うことに。相当な労力と時間を要した。

**恭仁宮発掘50年で深まった謎**

**国分寺建立の詔・聖田永年私財法が發布された政務空間（「朝堂（院）」）はどこか？**

- 天平十六年（744）1月1日 「朝堂で五位より上の官人を饗す」
  - 天平十六年（744）閏正月1日 「朝堂で百官に恭仁・難波のいづれを都と定めるべきか尋ねた。」
- 宮の東部または西部が有力な候補になる。しかし、国家を支える官衙（「曹司」）群は宮の中に収まるのか、という疑問。

**恭仁宮の付帯施設はどこにあるのか？**

- 『続日本紀』によると、恭仁宮の近隣には、「城北苑」（庭園）、「石原宮・羅原離宮」（離宮）、皇后宮（皇后・光明子の居住区）があったとされる。

**紫香樂宮跡から学ぶ**

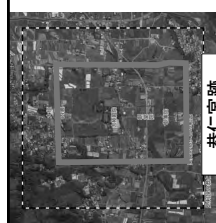
**恭仁宮と紫香樂宮（甲賀宮）  
どちらも古代国家の中心としては小規模**

恭仁宮 750×560メートル  
紫香樂宮中心部（宮町遺跡）400メートル四方くらいか

ただし、紫香樂宮は宮衙群が周辺に点在、複合的な構成であることが明らかになった。（2km四方以上の範囲に展開）

国家の運営に携わった役人の数、体制は同じ規模だったはず（2つの宮は完全に同時代）。

恭仁宮でも、関連施設が中心部の周辺に展開する可能性があるのである。



恭仁宮跡



紫香樂宮跡（宮町遺跡と関連遺跡群）

**恭仁宮発掘100年（!?）にむけて**



- 恭仁宮発掘50年のあいだに、地上から地中遺構を調べる手法が発展した。
  - 今後の50年を見据えて、先端技術を活かした調査を試みる必要がある。
  - 技術も使う人次第。調査担当者がいかに手強い恭仁宮と真剣に向き合う覚悟が必要。
- そして、紫香樂宮跡、難波宮跡、平城宮跡の調査成果に学び、各機関と協力しながら取り組むことが非常に大事になってくる。

## 発掘調査でわかった紫香樂宮の中心部

甲賀市教育委員会事務局  
歴史文化財課 小谷徳彦

### 1. はじめに～文献史料にみえる紫香樂宮～

#### A. 紫香樂宮の造営開始

- 天平14年(742)2月5日 恭仁京東北道の開通
- 天平14年(742)8月11日 造離宮司の任命
- 天平14年(742)8月27日～9月4日 聖武天皇の最初の行幸  
⇒ 恭仁宮の離宮として造営が開始される

#### B. 大仏造立の詔 天平15年(743)10月15日 → 甲賀寺の造営開始

- 甲賀郡の調庸を畿内に準じて減免
- 東海・北陸・東山道の調庸を紫香樂宮へ
- 甲賀寺の造営と大仏造立に行基とその弟子が関与

#### C. 紫香樂宮から甲賀宮へ

- 天平15年(743)12月26日 恭仁宮の造営停止
- 「甲賀宮」への名称変更 天平16年(744)8月頃
- 元正太上天皇が甲賀宮へ 天平16年(744)11月14日
- 遷都の宣言 大楯槍が立てられる 天平17年(745)元日

#### D. 平城還都

- 山火事の頻発 天平17年(745)4月1日以降
- 大地震の発生 天平17年(745)4月27日 以後、余震が頻発
- 恭仁宮(5月5日) → 平城宮(5月10日)

### 2. 紫香樂宮跡関連遺跡群と宮町遺跡の発見

#### A. 紫香樂宮跡関連遺跡群

- 雲井地域(信楽町北部)に奈良時代の遺跡が広く分布
- 史跡紫香樂宮跡の6地区 指定範囲が広範囲に分布
- 宮殿、寺院、官衙、工房などの諸要素

#### B. 宮町遺跡の発見と紫香樂宮の中心部の発見

- 昭和40年代のほ場整備で柱根の出土 → 地元の民家で保管
- 年輪年代法による伐採年の測定 天平14年秋～天平15年春
- 昭和58年度からの継続的な発掘調査
- 平成28年度の第32次調査以降 紫香樂宮の中心部が見つかる



### 3. 発掘された紫香楽宮の中心建物～主要殿舎を中心に～

#### A. 朝堂区画

##### a. 正殿 SB292001（第29・30次調査で検出）

東で北に1°振れる桁行9間（37.3m）、梁行4間（11.9m）の四面廂付きの掘立柱東西棟建物。身舎の規模は桁行7間（31.3m）、梁行2間（5.9m）。身舎の柱間寸法は、桁行総長31.3m（105尺）を7間等間とし、1間あたり4.5m（15尺）、梁行総長5.9m（20尺）を2間等間とし、1間あたり3.0m（10尺）である。廂の柱間寸法は桁行と梁行ともに3.0m（10尺）。

##### b. 後殿 SB292002（第29次調査で検出）

東で北に3°振れる桁行9間（90尺）、梁行4間（40尺）の四面廂付きの掘立柱東西棟建物として計画された未完成の建物。柱掘方の平均規模は東西1.0m、南北1.1m。掘方のみで柱痕跡を確認できない。門SB292500・東西堀①SA292200・東西堀②SA292300と重複し、いずれも後殿SB292002が古い。

##### c. 西脇殿 SB28193（第28次調査で検出）

北で西に3°振れる桁行24間（99.1m）以上、梁行4間（11.9m）の長大な掘立柱南北棟建物。身舎の規模は桁行23間（96.1m）以上、梁行2間（5.9m）。桁行の柱間寸法は、北廂が3.0m（10尺）、2～22間が4.1～4.2m（14尺）、23間目が4.5m（15尺）、24間目が4.5m（15尺）以上。梁行の柱間寸法は3.0m（10尺）等間。

##### d. 東脇殿 SB291001（第29・35・36次調査で検出）

ほぼ正方位の桁行21間（86.1m）以上、梁行4間（11.9m）の西脇殿SB28193に類似した掘立柱南北棟建物。桁行の柱間寸法は、北から9間目と13間目が3.9m（13尺）である以外、4.1～4.3m（14尺）。身舎梁行は総長2間（5.9m 20尺）を10尺等間。

#### B. 内裏地区

##### a. 西建物 SB303006（第29・30次調査で検出）

東で北に4°振れる桁行7間（24.6m）、梁行5間（14.9m）の南北二面廂付きの掘立柱東西棟建物。桁行の柱間寸法は12尺等間、梁行の柱間寸法は、廂にあたる北端間と南端間を3.7m（12.5尺）等間、身舎7.5m（25尺）を3間の等間割り（2.5m等間）。

##### b. 東建物 SB401003（第40次調査で検出）

東で南に1°振れる桁行7間（24.6m）、梁行5間（14.6m）の西建物SB303006と同様の南北二面廂付きの掘立柱東西棟建物。柱間寸法は、桁行が3.4～3.6m（11～12尺）、梁行は南北面の廂が各3.8m（13尺）、身舎が北から2.1m（7尺）、2.5m（8尺）、2.5m（8尺）。

西建物 SB303006 と比較すると、東建物 SB401003 は桁行総長が同じで、梁行総長が 0.3m 短い。西建物 SB303006 と東建物 SB401003 は、正殿 SB292001 の中軸線を挟んで対になる建物と考えられるが、建物の軸線の向きが異なるほか、両者は南北で約 6.5m ずれ、中軸線からの距離も SB303006 が約 10.5m、SB401003 が約 6.5m と、左右対称の位置にはない。

c. 門 SB292500 と東西塀①SA292200・東西塀②SA292300(第 29 次調査で検出)

門 SB292500 は、北に 2° 振れる桁行 5 間 (14.6m)、梁行 1 間 (3.0m) の掘立柱東西棟建物。南北中軸線上にあり、正殿 SB292001 の北辺から 14.1m 北方に位置する。桁行の柱間寸法は、東端間が 2.8m (9.4 尺)、中央 3 間が 3.0m (10 尺) 等間、西端間が 2.9m (9.7 尺) と、中央 3 間に比べて両端間がやや短い。梁行の柱間寸法は 3.0m (10 尺)。東西塀①SA292200 が門の東南隅柱に、東西塀②SA292300 が門の西南隅柱に接続する。

#### 4. 紫香樂宮中心部の配置と変遷

##### A. 朝堂区画：I 期

- 正殿と東西脇殿をコ字型に配置 古代の宮殿や官衙の中枢部に類似
- 正殿の背後に後殿を計画 → 計画変更により後殿を建設せず

##### B. 内裏区画：II 期 2 段階に分かれる

###### a. II 期 (a)

- 正殿の北方に西建物と東建物を計画 内裏の中心的建物
- 西建物に仮囲い 朝堂区画からの遮蔽 → 西建物の建設が先行か

###### b. II 期 (b)

- 後殿の南辺に合わせて、門と東西塀を設置 朝堂区画との分離
- 西建物の仮囲いを撤去と東建物の完成

##### C. 変遷の画期

- 後殿の建設中止時期：天平 15 年 (743) 後半か 税制が畿内に準じる措置
- II 期 (a) から II 期 (b) へ：天平 16 年 (744) 11 月 17 日  
元正太上天皇が紫香樂宮へ移る  
⇒ 西建物：聖武天皇  
東建物：元正太上天皇

#### 5. おわりに



A~F:史跡紫香樂宮跡(A:宮町地区 B:新宮神社地区 C:鍛冶屋敷地区 D:北黄瀬地区 E:内裏野地区 F:東山地区)  
 1:宮町遺跡 2:新宮神社遺跡 3:北黄瀬遺跡 4:鍛冶屋敷遺跡 5:東山遺跡 6:東出遺跡 7:内裏野廃寺 8:紫香樂宮東遺跡 9:雲井遺跡

図1 史跡紫香樂宮跡と紫香樂宮跡関連遺跡群 1 : 25,000

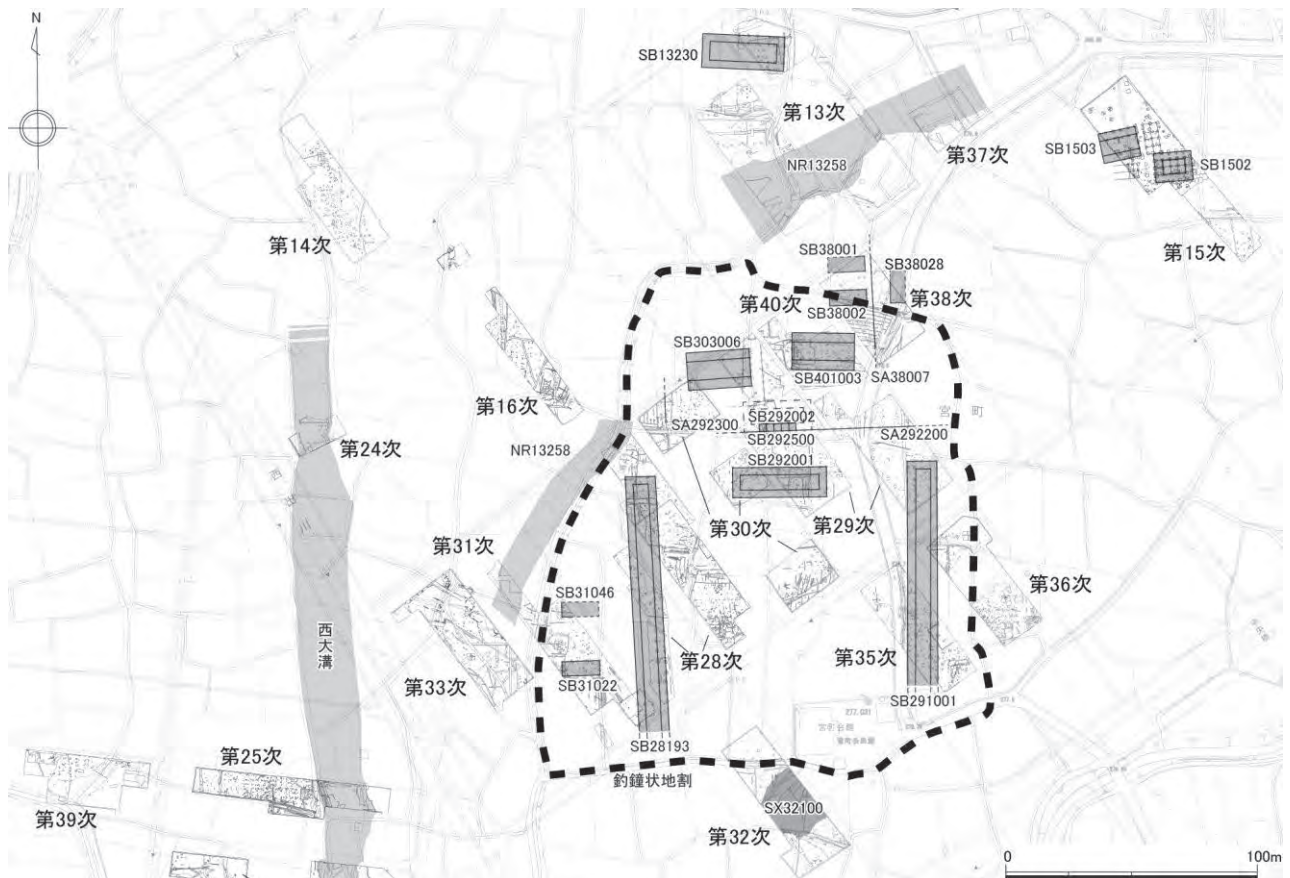


図2 検出した紫香樂宮跡の中心部と新旧水田地割 1 : 3,000

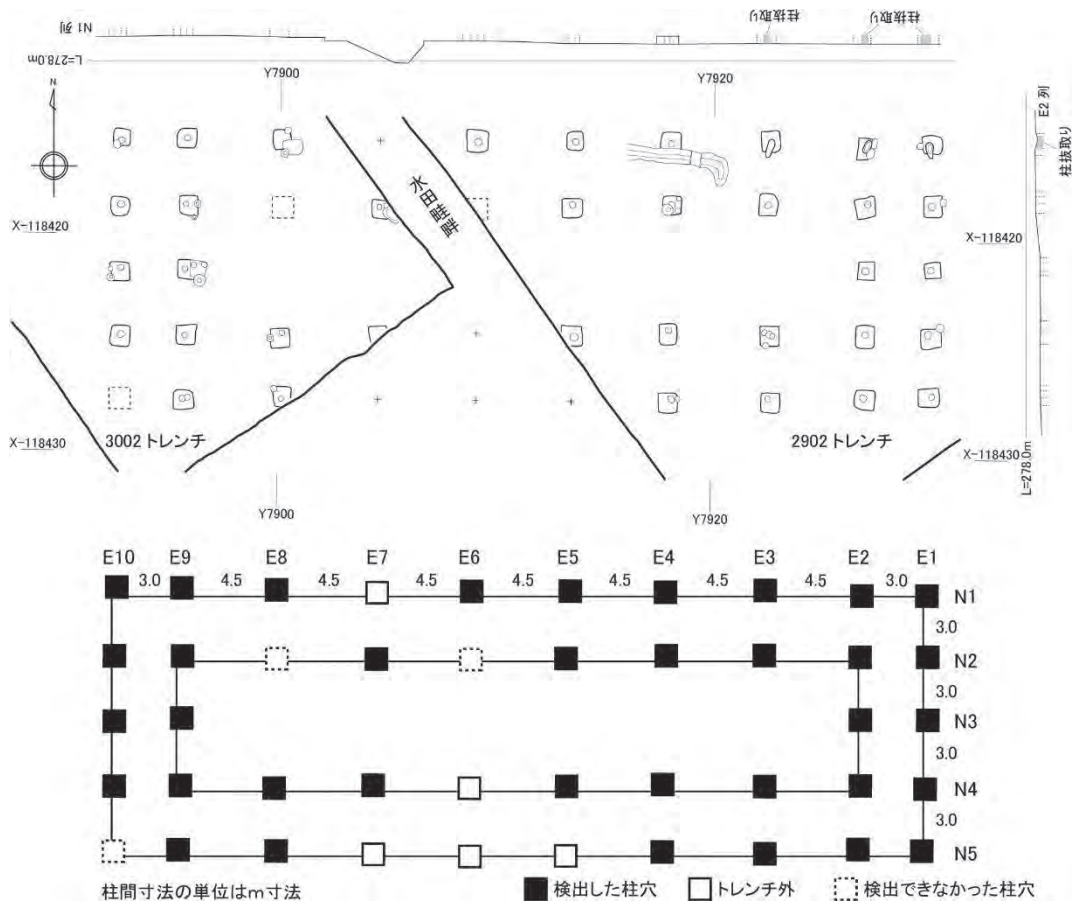


図3 正殿 SB292001 平面図・模式図 1 : 350

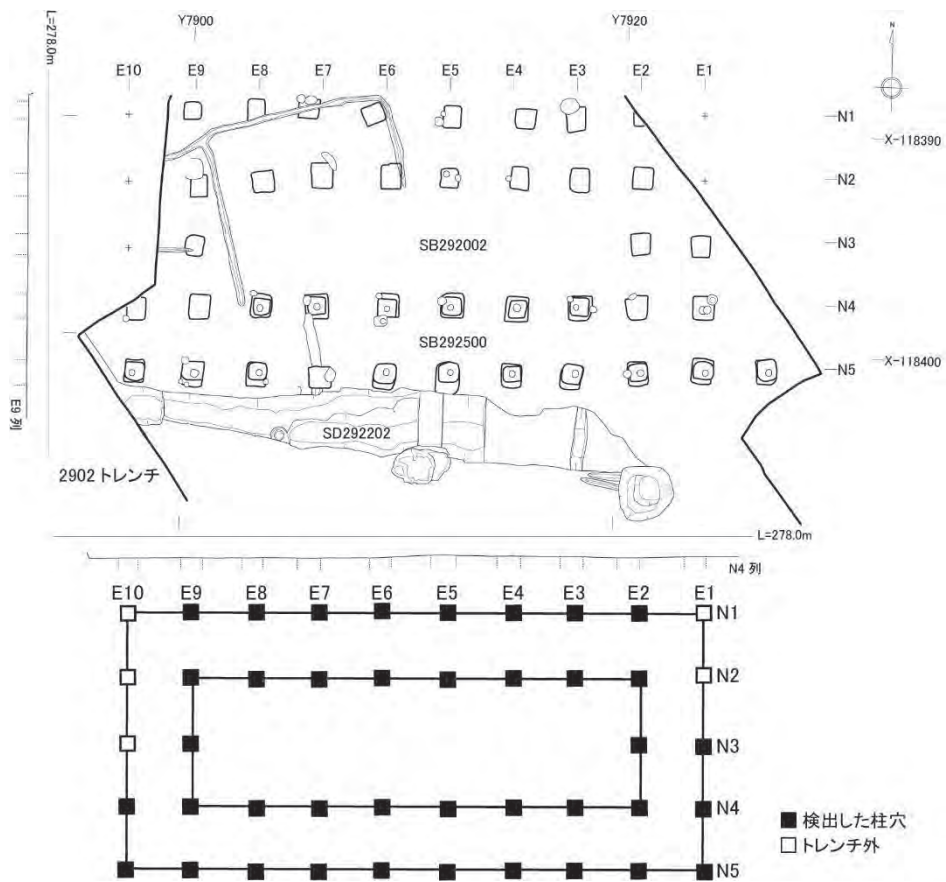


図4 後殿 SB292202 平面図・模式図 1 : 350

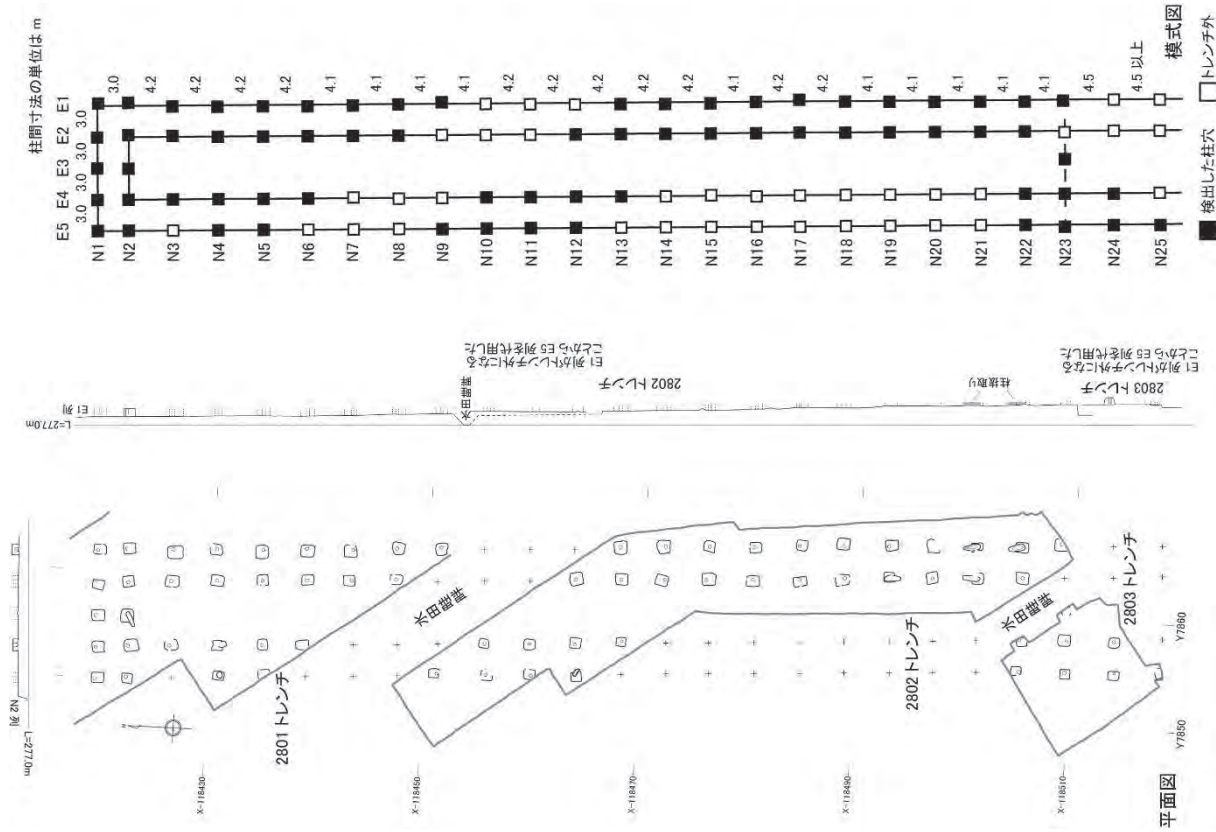


図5 西脇殿 SB29193 平面図・模式図 1 : 700

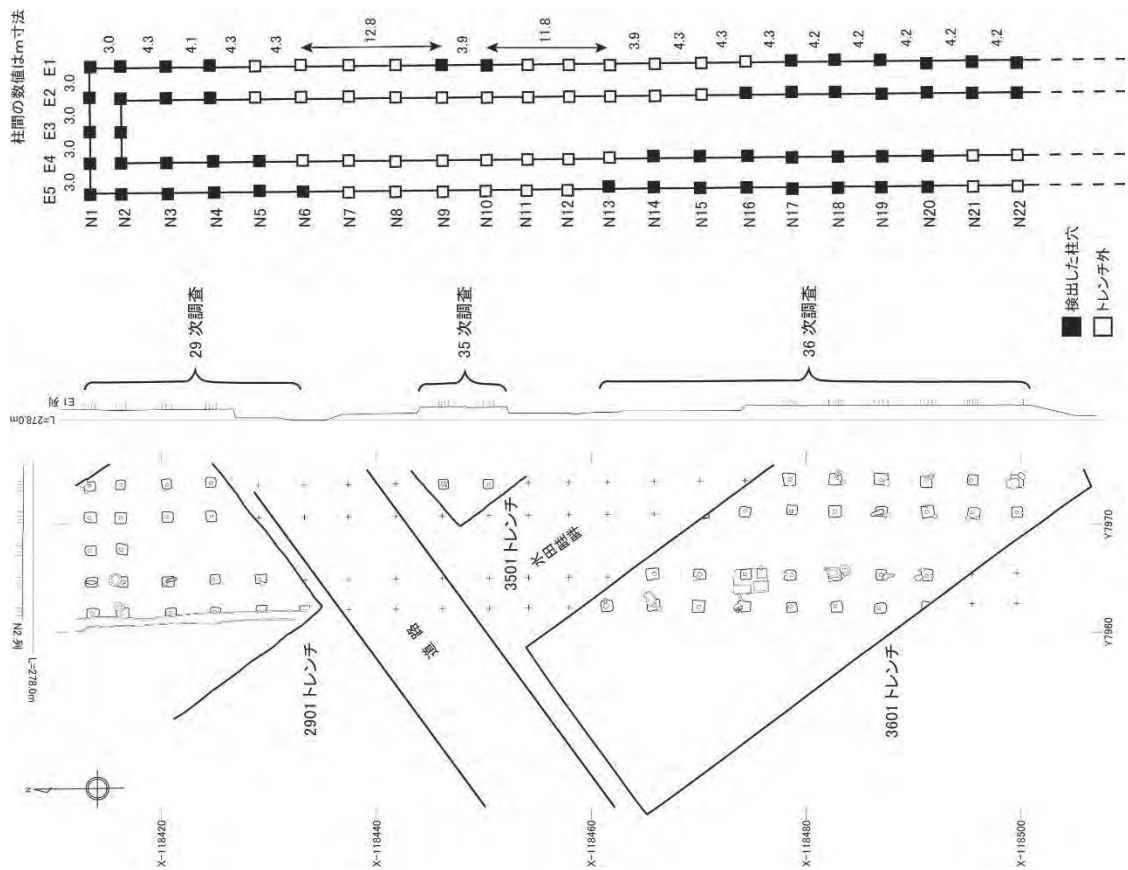


図6 東脇殿 SB291001 平面図・模式図 1 : 700

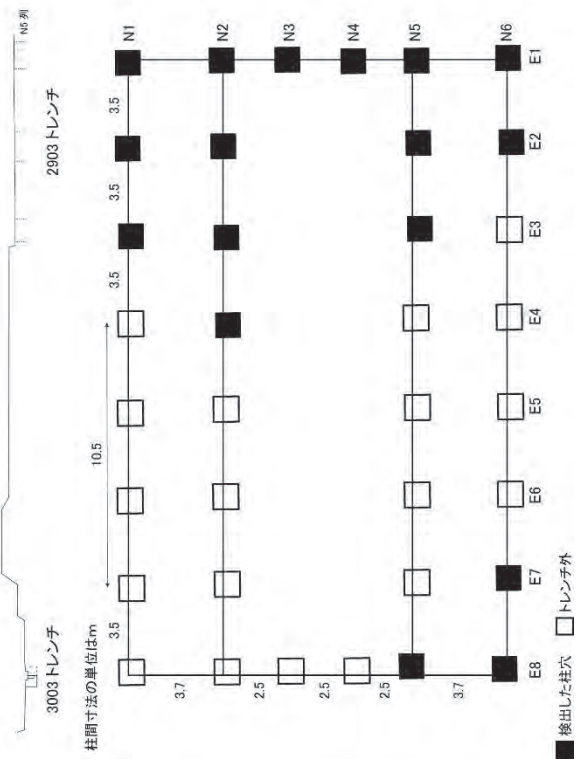
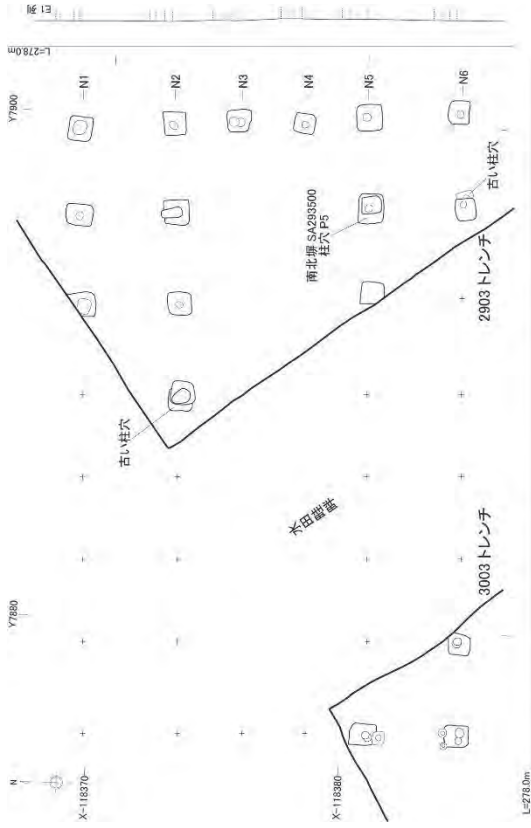


図7 西建物 SB303006 平面図・模式図 1 : 300

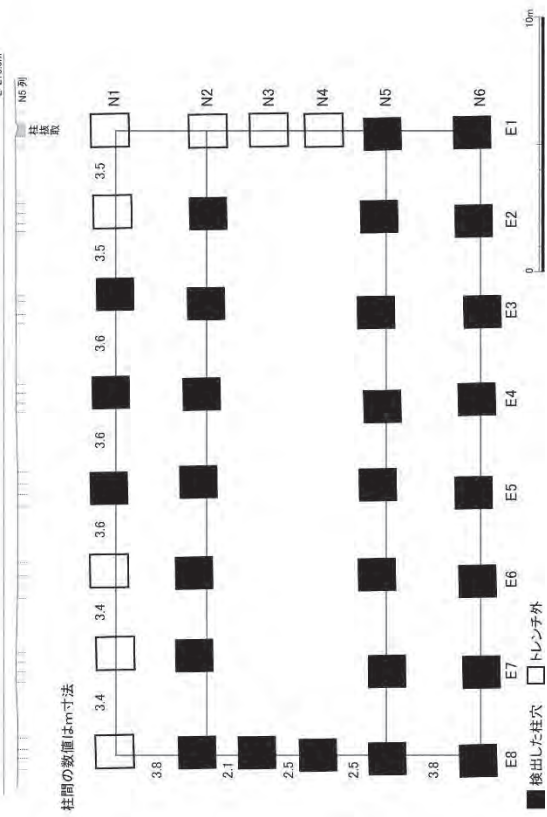
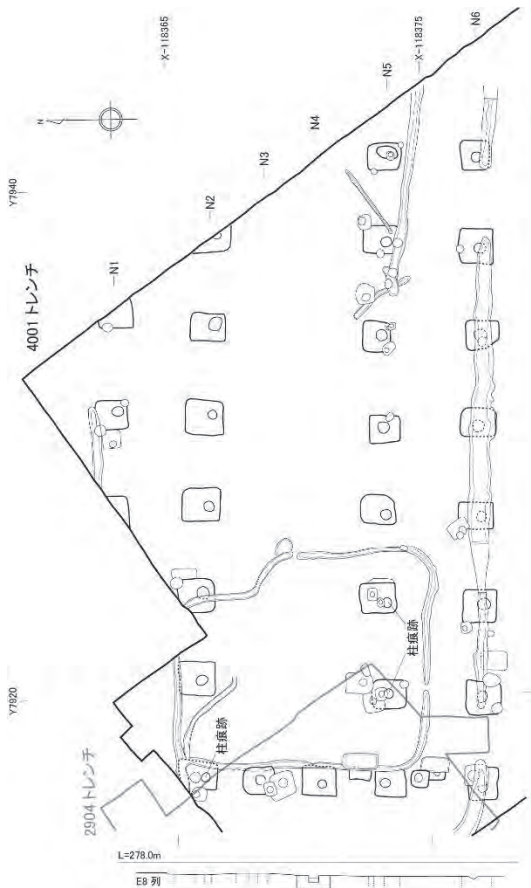


図8 東建物 SB401003 平面図・模式図 1 : 300

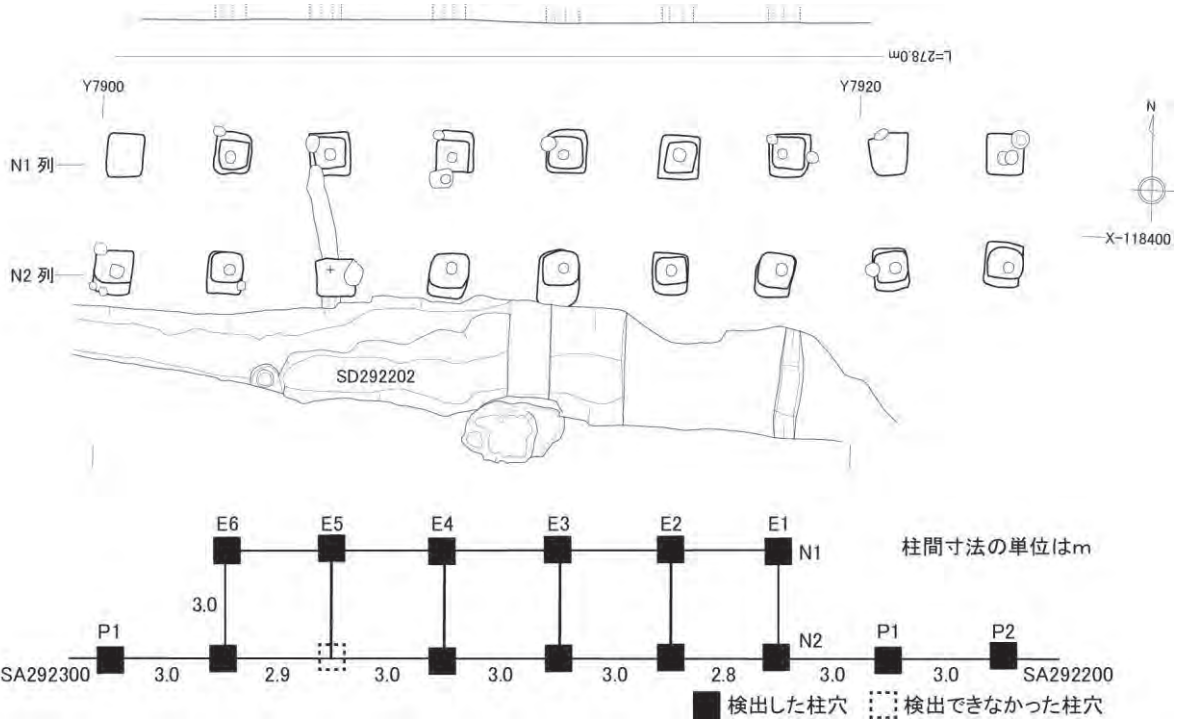


図9 門SB292500平面図・模式図 1:200

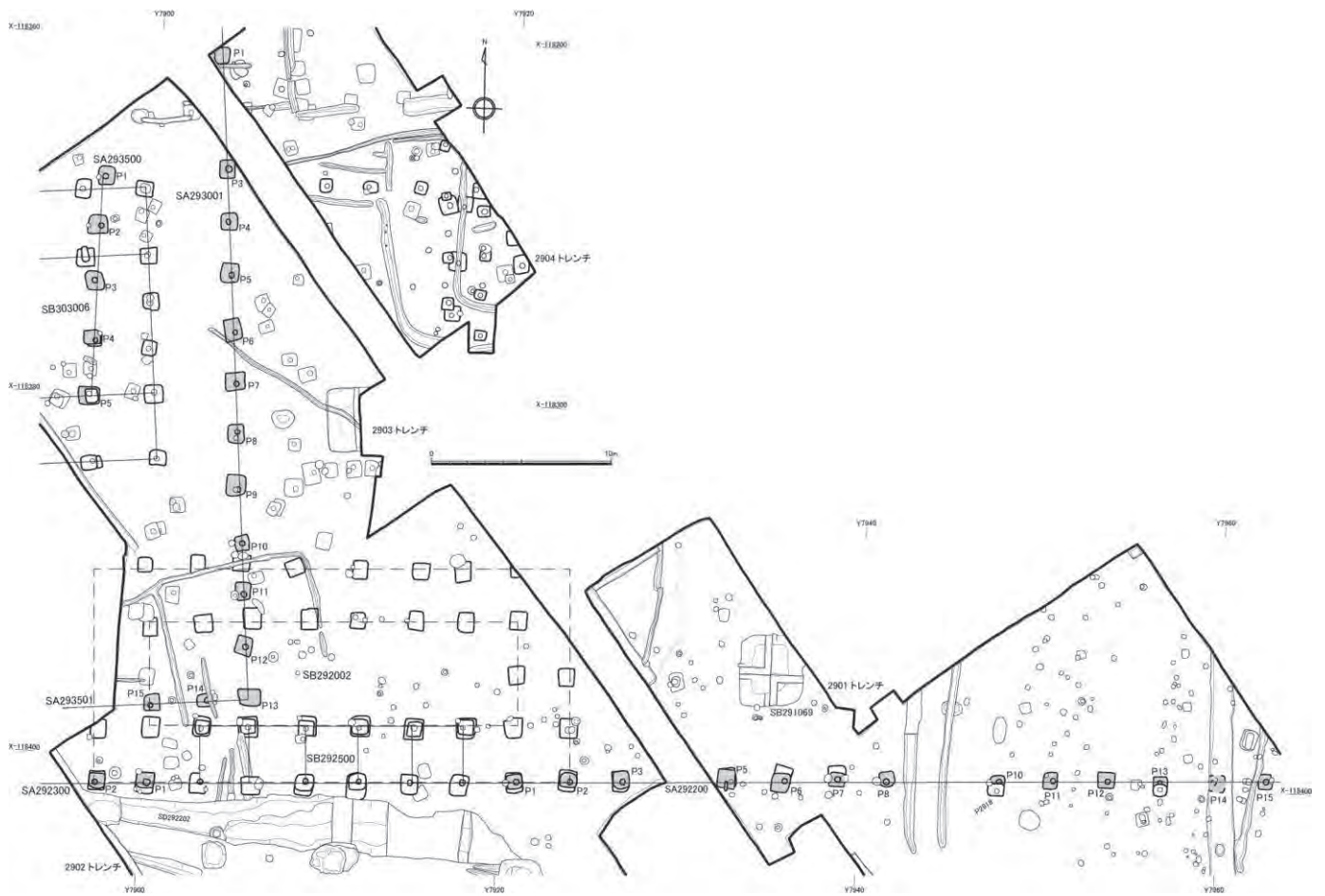


図10 東西塀①SA292200・東西塀②SA292300 1:400

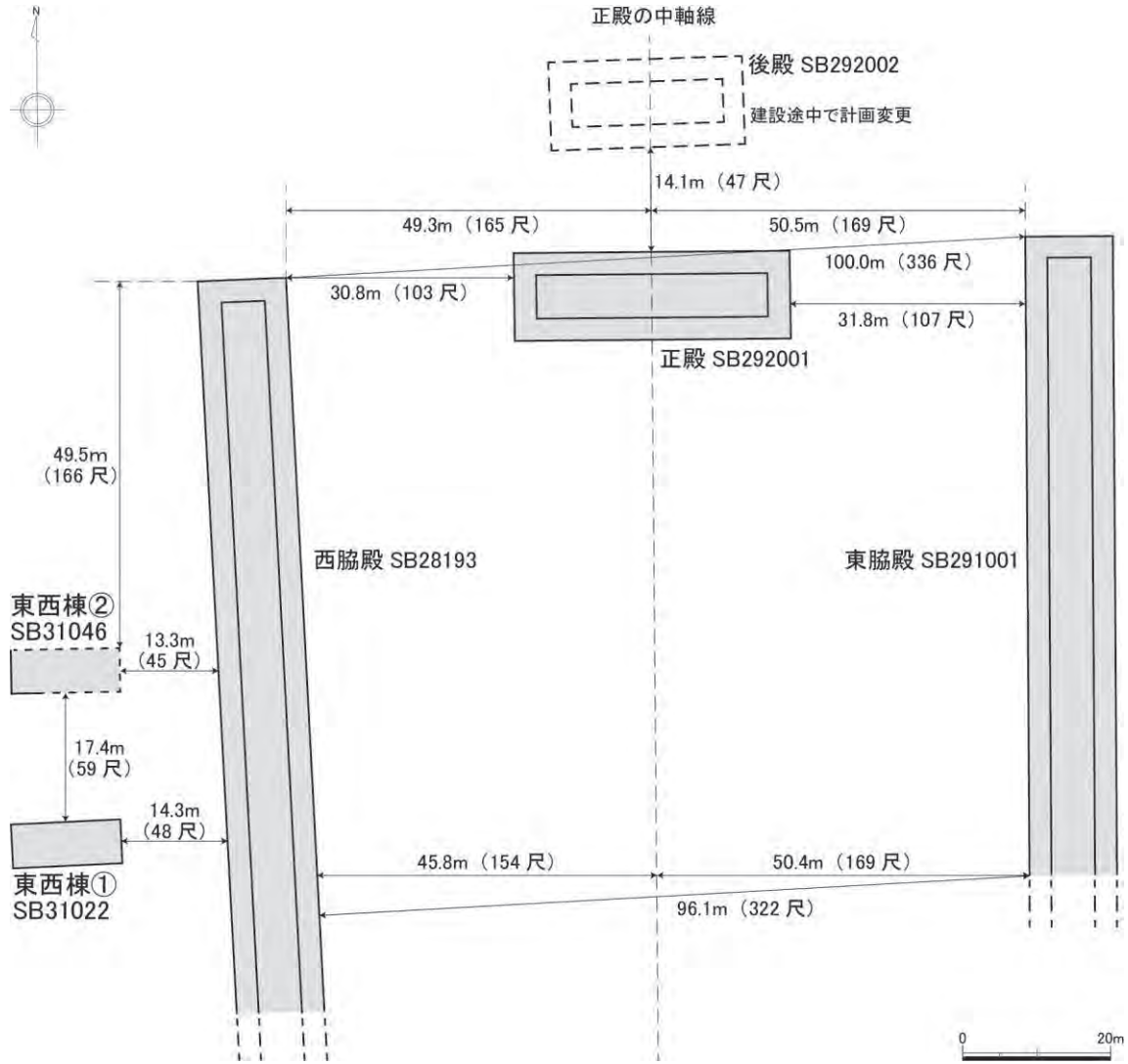


図 11 朝堂区画の建物配置 1 : 1,000

	朝堂区画		内裏区画				実務的建物		埋め立て		文献上の動き
	正殿	後殿	脇殿	西建物	東建物	門	南塀	自然流路	整地		
I 期	天 平 14 年										聖武天皇行幸 1 回目
	天 平 15 年	建設中止								計画変更	聖武天皇行幸 2 回目 聖武天皇行幸 3 回目
II 期 (a)	天 平 16 年	正殿と脇殿 完成		西建物 完成	東建物 完成	門 完成	南塀 完成				聖武天皇行幸 4 回目 10 月 15 日大仏発願の詔 12 月 26 日恭仁宮の造作停止
	天 平 17 年			仮設塀 撤去							聖武天皇行幸 5 回目 2 月 26 日難波宮の皇都宣言 3 月 14 日大安殿で大般若經の転読
II 期 (b)	天 平 17 年										11 月 17 日元正大上天皇 紫香樂へ 元日大榓檜を立てる 御在所で宴を行う 1 月 7 日大安殿と朝堂で宴を行う 5 月 5 日聖武天皇 紫香樂宮を去る

図 12 紫香樂宮中心部の造営変遷



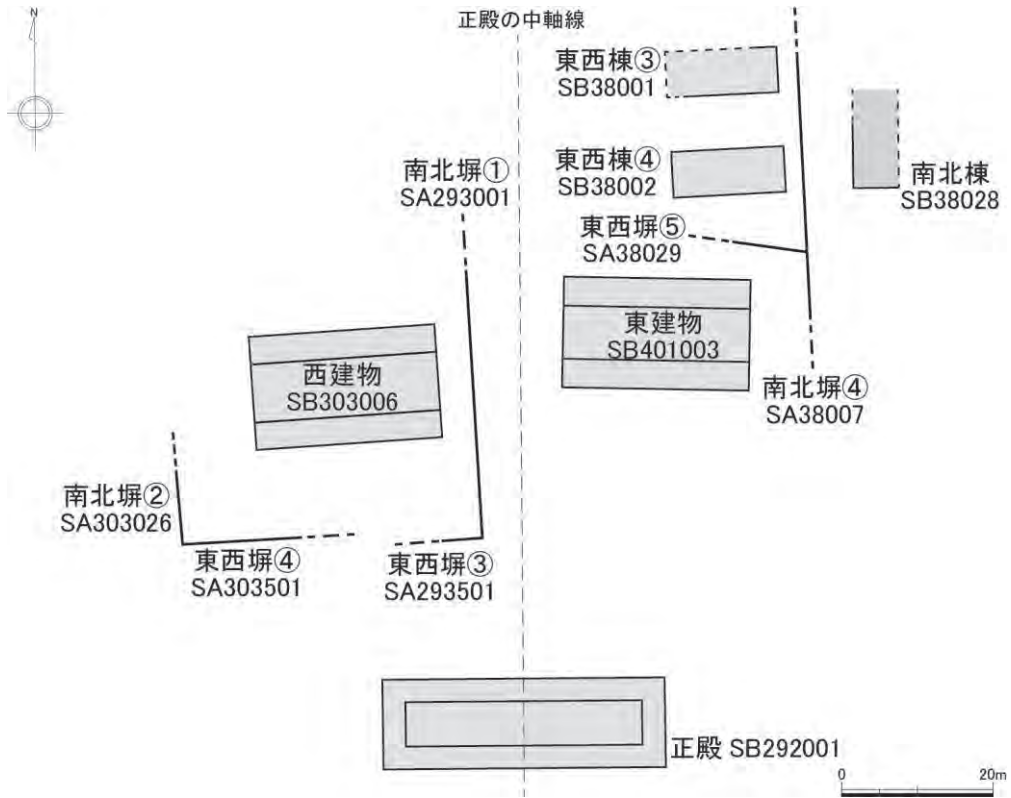


図 13 内裏区画の建物配置 (a) 1 : 1,000

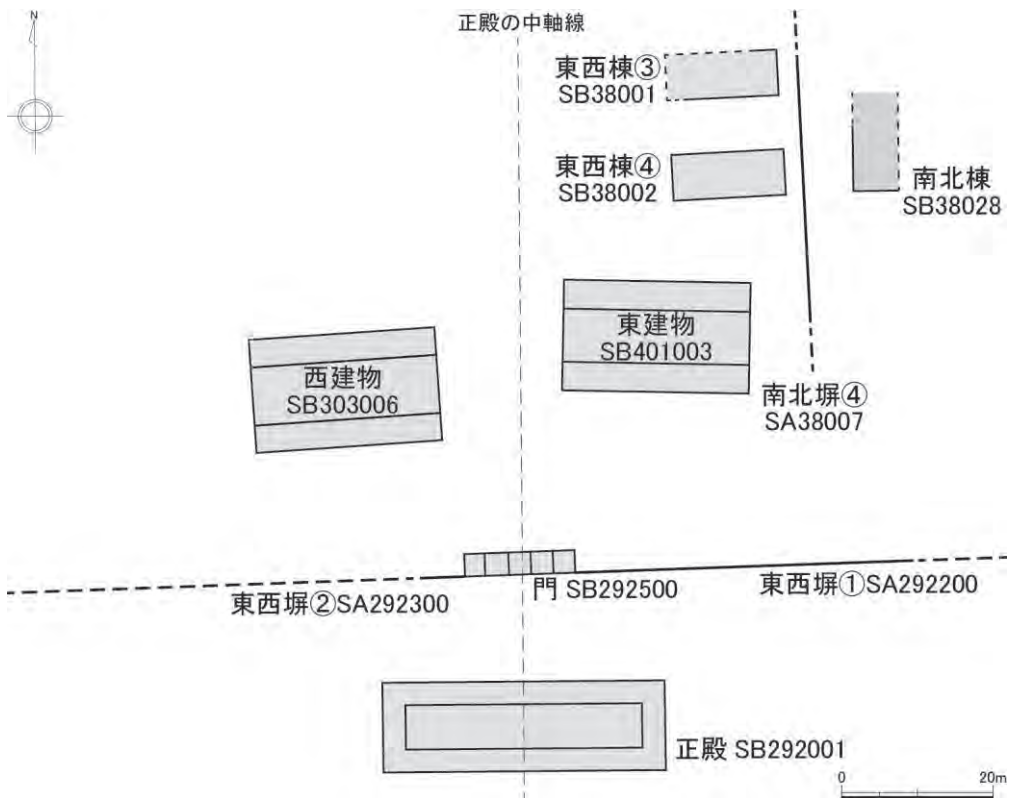


図 14 内裏区画の建物配置 (b) 1 : 1,000